

パネルディスカッション
(学習ネットワークと生涯学習：
公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習16
」)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅野, 文彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008433

パネルディスカッション

菅野（コーディネーター）——3人あるいは岩科さんを含めて4人のシンポジストの皆さん、貴重なご報告をありがとうございました。できるだけ高校生の皆さんを中心とする参加者からたくさんのご質問を受けたいのですが、最初に一点だけ、この16回を迎えるシンポジウムには副題が付いていて、今回は「地域と大学で何ができるか？」というものでした。記録も残るものですので、これについてシンポジストの先生方から短くお言葉を頂戴したいと思います。

大学は、古くは教育と研究の二つが仕事だといわれてきました。最近になって第三の領域などといわれて、教育と研究に加えて、地域連携や社会貢献も大事な仕事だといわれることが増えています。しかし、これらは別々ではなくて、どうも重なっていたり、つながっていたりするのだらうと思います。この重なりやつながりは、知の提供・普及という形でかなり見られていますし、平野先生の事例からは、地域とつながることで逆に大学の知が豊かになるということも教えていただいたような気がします。決して一つのパターンということはないと思うのですが、それぞれの先生方、皆さま方の社会貢献・地域連携がどんな意義を持っているのか。どんなふうに捉えておいでなのか。教育や研究とどんなふうにつながっているのか。重なっているのか。あるいは、地域とつながる上でのご苦労や醍醐味といったようなことなど、何でも結構ですので一言いただいて、その後の質疑に結び付けたいと思います。

松永——私たちがが生活している中で、新しいものをいかに生み出していくか、新しいものにいかに挑戦していくか、環境自体をいかに変えていくかを考えながら研究しています。地域との連携についてですが、「子どもたちの笑顔のために」というテーマで地域と連携しながら教材開発をしています。子どもたちの「楽しく勉強したい。興味を持って、勉強したい。新しいものに挑戦したい。」という思いを大切に、地域と連携して、小学校、中学校、高校と連携していくことを考えています。

杉崎——先ほどの発表でも申し上げたのですが、書写書道だからといって、自分自身が書くことだけではないのです。文化継承ももちろんそうですが、「書く」ということそのものを追究しています。最近では、例えば静岡の「静」は何画だっけというときに、手を動かしますよね。そういう空書きなどが脳にどういう働きをしているか、あるいは、なぞり書きがどのような効果を持つのか。では、毛筆で書くことにはどのような意味があるのだろうか。言葉を紡ぐということ自体はどんな効果があるのだろうかというようなことも含めて考えて、長い歴史の中で大事に継承されてきた文字文化を丸ごと考えるのが、書文化だと思っています。そして、そのノウハウをもって地域に貢献していくという在り方を、今後も頑張って進めていこうと考えています。

岩科——私は学生という立場から、どうして地域の文化を調べるようになったのかをお話したいと思います。私は、地域のことを知らないのはとても悲しいことだと思うのです。「静岡ではどういうことやっているの」と他県や他国の人に聞かれたときに、説明できないのは悲しいと思っているので、静岡を知りたいという気持ちが強くて静岡のことを調べ始めました。そして、自分が調べて分かったことを地域の皆さまに伝えることで、地域の皆さまも知らなかったことを知ってもらって、「ああ、静岡ってすごいのだな」と自分たちで認めることができる、それを他の人にも認めてもらえるというのがとても大きな原動力でもありますし、成果の一つでもあると思っています。

平野——今、4年生の岩科律子さんは『あそび』の研究をしてくれていますが、隣で聞いていて「ああ、なるほど」と思ったのは、先ほど私がキーワードとして出した「シビックプライド」という言葉です。地域の、自分たちが住んでいるところにどんな財産があるのかということ、きちんともう一度見直す。そ

して、まだスポットが当たっていないことをつまびらかにして、みんなに提供していく。あるいは、もう既に見ていること、みんなが知っていることでも、違う見方を提供していく。そういうことを彼女がやり始めてくれているというのが、一つの成果だと思います。

それからもう一つ、私の立ち位置というか、私が授業をしているのは人文社会科学部の言語文化学科というところです。そこには文学、例えば『徒然草』などを研究したりしている学生や先生もいます。そして、就職活動で企業の人から『徒然草』なんかやって、うちの会社で何の役に立つの』などと言われてしまって、学生たちが困って帰ってくるのです。でも、そういうことを学ぶことによって心が豊かになるし、いろいろなものを見る目が育つ。あるいは美術でも、何か一つの絵を見ることができるようになっても、今日のご飯がおいしくなるわけではありませんし、明日もらう給料が突然多くなるわけでもない。しかし、人間として心豊かに生きていくということは、とても大事なことだと思うのです。ですので、私はなるべく人文という立ち位置から、世の中に何かを発信していくことを心掛けて生きているつもりです。

菅野——ありがとうございます。残り10分弱になりました。高校生の皆さんはそれぞれ課題についても考えてこられたでしょうし、市民の方でも結構です。3件のご報告について、どなたに向けてでも結構なので、質問を頂いて、一問一答形式で進めたいと思います。

平野——すみません、一言だけ。先ほどから、平野は学生と一緒に何かものを食べたり飲んだりというようなことばかり言っていて、きちんとやっているのかと思われると思うのですが、学生は私の授業の中で取り組んだもので、いろいろな賞を受賞してくれています。静岡新聞広告賞のグランプリを受賞したり、専門のクリエイターや広告会社が挑戦しても取るのが難しい日本新聞協会賞という賞を、次々と取っています。人文社会科学部の言語文化学科なので、普段はデザインやコピーライターのようなことは全くしていません。しかし、何を伝えなければいけないのか。どういうふうに伝えなければいけないのか。どういうふうに伝えれば人にメッセージが届くのかということを学生が原点に戻って真剣に考えることで、こういう成果が出てくるのです。

ですから、デザインをするためにデザインの専門学校に行く必要は別にはないとは言いきれないのですが、そこだけではないのです。地域と連携し、伝えなければいけないことは何か、どのように伝えれば届くのかという原点に戻ることによって、いろいろなことが可能になっていくということを、少しお伝えしようと思いました。

菅野——どなたか口火を切っていただきたいと思います。よろしくお願いします。

質問——食べたり遊んだりしていて楽しそうな雰囲気に見えるのですが、その中でも真面目に話し込んでいるのか、おちゃらけながらやっているのか。どのような雰囲気のところですか。ごくいいアイデアが生まれるのか、とても気になります。

平野——質問ありがとうございます。私は今までいろいろなことを試みてきました。日本語には「同じ釜の飯を食う」という言葉があるのですが、一緒に何かをする。大学の授業は前期と後期と分かれていて、それぞれ15回ずつあるのですが、その中だけでは、こういうプロジェクトは進みません。やはり普段から人間関係をつくっていかないといけないのです。そのときに、一緒に何かを食べるとか、一緒に何かを考えていくということが、とても重要なのです。一緒に何か食べていると、その時間に普段授業の中では話せないことなどがいっぱい出てきます。私はそういうことがすごく重要だということを経験的に実感していますので、意図的にこういうことをよくします。やはり、やるのとやらないのでは全然違います。一緒に食べよう。

質問——いろいろな人がすごい賞などを受賞されていますが、受賞する生徒はどういうタイプの生徒が多いのですか。

平野——タイプはとりわけないのですが、あきらめないで続けている学生だと思います。岩科さんは1年生のときに授業に参加してくれたのですが、4年生の今まで続けてくれています。そうやって継続していく、あきらめない学生が、最終的に成果を出してくれます。

皆さん、国語辞典を引いたことがありますか。「あきらめる」と引くと、最初に「明らかにする」と書いてあります。「あきらむ」というのは「明るい」という字を書くのです。つまり、「あきらめる」というのは、放り投げてしまうことではなくて、いったん分かった上で、少し脇に置いておくことなのです。「あきらめない」とは、続けることです。そういう人が成果をいっぱい出しています。

杉崎——書の場合、継続的に学習して技能を高めるものなので、何もせずに急に賞を取れるレベルになるということは、まずありません。学生は入試を勝ち抜いたことで、ある程度プライドを持って大学に入ってきますが、その自信が、がたがたと崩れるときがあるのです。ですから、「あきらめない」というのももちろんあるのですが、まずは一回、肩肘張らずに力を抜く。「私ってできるんだ」と思わない。そうなっ

てからが、ぐっと伸びる気がします。

質問——僕は今、長泉に住んでいるのですが、静大なら電車通学与一人暮らし、どっちがお勧めですか。

岩科——私は清水に住んでいるので自宅から通っていますが、絶対に一人暮らしの方が楽しいと思います。周りを見てみると、やはり学校が近いので、図書館に遅い時間までいられるということもあるのですが、下宿生同士が部屋で集まって徹夜して語るみたいなのは、非常にうらやましいです。なので、学生時代に勉強だけではなくいろいろなことをしたいと思うなら、下宿もいいのではないかと思います。

杉崎——長泉の御殿場線に近いところにお住まいですか。下土狩駅とか。なめり駅に近い？。では、帰れなくはないけれど、東海道線はよく止まるので、やはり下宿ですね（笑）。

質問——私は理科がすごく苦手で、今日は機械の話をされても、グラフなどを見ても全然分かりません。女の子はそういうのが苦手だと思うのですが、女の子はいますか。

松永——研究室は半数が女性で文系の学生もいます。ですから、研究室に入ってから物理・数学の基礎的な内容や実権を学びます。模型の動きをビデオで記録して、それをコマ送り画像に分解して、どのような動きをしているか、位置・速さを測定し、解析結果との比較を行います。

皆さんの周りにあるものは、すべて誰かがつくったものです。100円ショップで100円で売っているものも、誰がどのように作るのだろうかと考えてみてください。本当にこれが100円で作れるのだろうかと思います。「ものづくりは、人づくり」と言われます。自分でつくったものに対する思い、他人がつくったものを使わせてもらっているという思いも、ものづくりの大切な部分です。人間が2本の手を得て、その手で道具を創り出し、ものづくりを行ってきた。知恵と工夫によって環境を変え、ひとの役に立つものを生み出し、世代を超えて、親から子、子から孫に伝えていく。ものづくりを教える上で大切な内容だと思います。ぜひ一緒に研究しましょう。

菅野——つたない進行で申し訳ありませんでした。以上で終わらせていただきます。4人のシンポジストの皆さんに拍手を頂きたいと思います。